

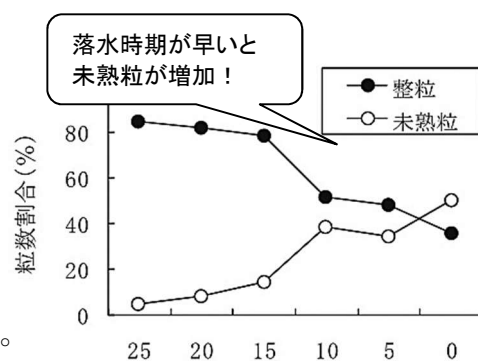
## 高温継続、成熟期かなり早まる！ 刈遅れによる品質低下に注意！

### ここがポイント！！

- 1 可能な限り出穂期 25 日後までは飽水管理を徹底
- 2 出穂後積算気温を参考に、籾の黄化程度を確認し、収穫適期を判断
- 3 早めの収穫、丁寧な乾燥・調整に努める
- 4 稲わら・籾殻は 10 月中旬までにすき込み、土づくり効果を高める

#### 1 登熟期間の水管理

- (1) できる限り出穂期後 25 日までは飽水管理を継続する。  
 落水は可能な限り遅くし、稲体へ水分供給を行う。
- (2) 異常高温やフェーンが予想される場合は、あらかじめ  
 2～3cm湛水し、フェーン通過後速やかに落水する。  
 (長期間の湛水は厳禁！)。
- (3) 新之助など成熟期が遅い品種は、最終通水日に湛水する。
- (4) 用水の確保が厳しい地域もあることから、水資源は大切に使用する。落水時期(出穂後日数)



#### 2 主な品種の出穂期と収穫適期のめやす

図1 落水時期と米品質

- (1) 積算気温による収穫期の予測はめやすであり、収穫適期に近づいたら、必ずほ場で籾の黄化割合を確認し、収穫作業に入る。
- (2) 積算気温の収穫期予想では、早生で平年比5日、コシヒカリで4日程度早い(8/17 現在)。
- (3) 出穂後積算気温による収穫適期のめやすは、最新の情報を確認する(新潟農業普及指導センターHPに掲載)。
- (4) 早生の出穂以降、高温が続いており、また、今後も高温が継続すると予報されていることから、新潟次郎以外の品種は高温登熟年の積算気温をめやすとする。

表1 収穫適期のめやす(8月17日現在)

品種		出穂期 <sup>※1</sup>	収穫適期の 出穂後積算気温	収穫適期 <sup>※2</sup>	
早生	新潟次郎(飼料用)	7月15日	1,000℃	8月20日	
	五百万石	(新潟・五泉)	7月17日	925℃ <sup>※3</sup>	8月19日
		(阿賀)	7月21日		8月27日
	わたぼうし	7月18日	8月20日		
	ゆきん子舞	7月21日	8月24日		
	こしいぶき	(新潟・五泉)	7月23日		8月25日
(阿賀)		7月27日	9月1日		
中生	こがねもち	7月28日	950℃ <sup>※3</sup>	9月1日	
	コシヒカリ(5/5 植)	8月2日	950℃ <sup>※3</sup>	9月7日	
	コシヒカリ(5/10 植)	8月4日	950℃ <sup>※3</sup>	9月10日	
晩生	新之助	8月10日	1,000～1,050℃ <sup>※3</sup>	9月20日～21日	

- ※1 早生・中生は5月5日植え、新之助は5月中旬植えを想定。
- ※2 新津アメダスを活用(五百万石(阿賀)とこしいぶき(阿賀)は津川アメダスを活用)。今後の気象により変動する可能性あり。
- ※3 下線は、高温登熟年における出穂後積算気温

### 3 収穫時の留意点

- (1) 出穂後積算気温を参考に収穫適期を予測し、早めに収穫計画を立てる (表1)。
- (2) 実際の収穫作業は、籾の黄化率を確認してから行う。黄化籾の割合が85~90%になった頃が収穫適期である (図2)。  
 ア 茎葉や穂軸は青くても籾は成熟している場合があるので、ほ場ごとに黄化状況を確認する。  
 イ 早刈りは青米・未熟粒の混入増加や収量低下の原因となり、刈遅れは胴割粒・着色粒等が増加して品質低下につながる。
- (3) 今後も高温が予報されており、コシヒカリや晩生品種についても、刈取り適期より2日程度早めに刈り取る (基部未熟粒・胴割粒の発生防止)。
- (4) 刈取り直前にフェーンなどの異常高温や強風が続くと、籾水分が急速に低下し胴割れが発生しやすくなるため、すみやかに刈り取る。
- (5) 墨黒穂病や稲こうじ病が発生したほ場は、稲体が乾燥している状態で収穫し、無発病のほ場とは別に乾燥する。

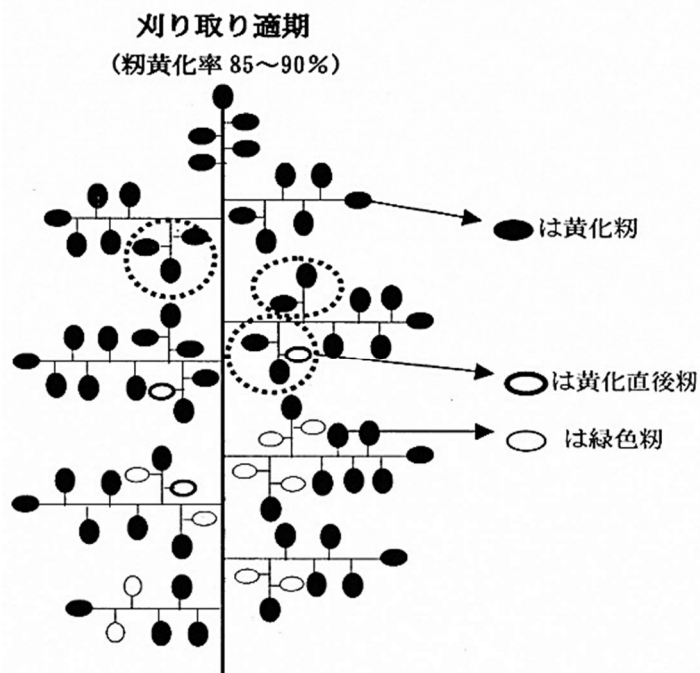
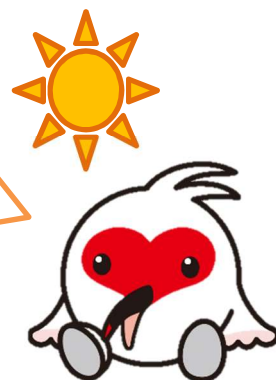


図2 刈取適期における1穂内の籾変化状況

#### 【黄化籾率の調査方法】

- ① 1次枝梗が9本程度の平均的な穂を選ぶ。
- ② 上位3~4本目の1次枝梗に着生する2次枝梗籾が黄化しているか確認する。
- ③ 上記について、10本の穂で確認し、8本以上該当したら刈取適期とする。

近年、高温登熟によって収穫適期の幅が短くなり  
 刈り遅れによる品質低下が多く見られます  
 高温年は ◎収穫作業を早める  
 ◎カントリーエレベーター等の活用  
 など、工夫をして適期収穫を行いましょう！



## 4 適正な乾燥・調製

### (1) 適正な乾燥

ア 食味低下や胴割粒発生防止のため、張り込み時の水分に応じた温度を設定する（表2）。

表2 乾燥温度のめやす

張り込み時水分	28%	24%	18%以下
乾燥温度	40℃以下	50℃以下	昼間に通風循環後、夜間に加熱乾燥

イ 玄米水分量を15%に仕上げる。（乾燥中の水分測定をこまめに行う）

ウ 張り込みが少ない場合は、乾燥が早めに仕上がるので過乾燥に注意する。

エ 刈り遅れた場合や成熟期頃にフェーンで乾燥した日が続いた場合、立毛胴割れが予想されるので、乾燥速度は毎時乾減水分0.5%以下になるよう送風温度を低く設定する。

オ フェーン現象時は、日中の加温乾燥は避け、常温で通風乾燥を行い、点火は夜間等に気温が下がってからとし、送風温度を低めに設定する（乾燥機に2段乾燥機能が備わっている場合は活用する）。

カ 青米の混入が多いなど籾水分にバラツキが大きい場合は、水分18～20%で乾燥を一旦停止する。通風循環で穀温を冷まし、半日程度貯留して水分ムラを解消した後、再乾燥を行う。また、乾燥終了後に、水分の戻りがあるため、仕上げ水分に注意する。

### (2) 調製

ア 肌ずれ防止のため、籾の温度が常温近くまで下がってから籾すりを行う。

イ ゴムロール間隔は0.8～1.2mmを基準に、脱ぶ率が80～85%になるよう調節する。

ウ 1.85mm以上のふるい目の使用及び適正流量による選別を行い、一等米に仕上げる。

エ 未熟粒や被害粒が多い場合は、流量をしばってくず米除去の精度を上げ、1.9mmのふるい目や色彩選別機を活用し、整粒歩合を高める。

## 5 次年度に向けた土づくり

### (1) 稲わらの秋すき込み

稲わらの秋すき込みは堆肥施用と同等の「土づくり」効果が期待できるため、以下の点に留意して実施する。

ア 稲わらのすき込みは収穫後なるべく早く、遅くとも10月中旬までに行う。（秋が深まり気温（≒地温）が低くなると、すき込んだ稲わらの分解は進まない）。

イ 耕深は5～10cmの浅うちとし、稲わらと土壌を十分に混和する（稲わらすき込み時に深耕すると、下層の稲わらは分解しない）。

ウ 稲わらを春にすき込むと、根腐れの原因となるワキ（硫化水素）の発生で、初期生育不良となるため、秋すき込みの方が好ましい。

エ 雑草イネの発生が見られるほ場では、秋すき込みは行わない（地表の種子の凍死、鳥の摂食により種子量の減少が期待できる）。

## （２）ケイ酸供給源として籾殻の有効利用

ケイ酸質資材の施用により、稲体の健全化、耐倒伏性の強化、病虫害の抵抗性強化、高温ストレスの軽減による登熟の向上等が期待される。

多くの水田土壌でケイ酸が不足しているため、以下の点に注意し、籾殻を水田にすき込み、有効活用を図る。

ア 籾殻の施用量はそのほ場から得られた籾殻量（120～130kg/10a）とし、均一に散布する（籾殻を多量に施用すると、翌年、ワキの発生等で稲の初期生育が抑制される）。

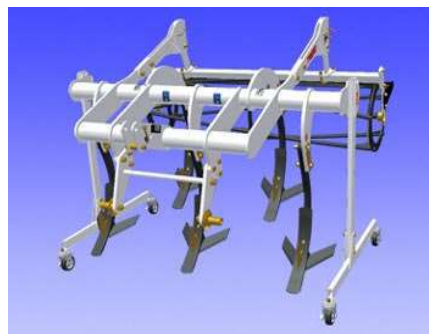
イ ごま葉枯病、稲こうじ病、墨黒穂病が多発生したほ場の籾殻や、雑草種子が多量に混入した籾殻は施用しない（翌年の稲の病気や雑草の発生源となる）。

## （３）堆肥や土壌改良資材の積極的な施用

ア 土壌診断に基づき、不足している成分を補う土壌改良資材を施用する。特に、ケイ酸を含む資材は積極的に施用する（ケイ酸カリ、ケイ酸カルシウム）。

イ 稲わら・堆肥などの有機物の投入は、地力増進や土壌物理性の改善に効果的である。

ウ チゼルプラウによる荒起こしは、ほ場の排水性を向上させ、稲わらの分解促進や乾土効果による初期生育の向上、春作業の効率化等が期待できる。



チゼルプラウ



収穫作業は、安全対策を徹底！農作業事故に注意！

- 転落、転倒はコンバイン後進時に多く発生  
→ 進行方向の安全を確認し、無理のない走行を！
- 巻き込まれ事故は、点検整備、清掃中に多く発生  
→ エンジンを停止し、適切な服装で行う  
エンジン作動中は機体の中に手を入れない！

メルマガ登録募集中！ フェーンや異常高温等の緊急情報を受け取ることもできます！

〈申込先〉 [ngt112130@pref.niigata.lg.jp](mailto:ngt112130@pref.niigata.lg.jp)

件名に「作物技術情報メルマガ登録希望」、本文に「名前」「住所」「電話番号」をご記入ください。

※登録された個人情報はメルマガの送信以外には使用しません。

迷惑メール設定等をされている方は、ドメイン指定等により受信できるようにしてください。

